

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：32678

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K14182

研究課題名（和文）ヴィジュアル・ナラティブによる保育実践の省察に関する研究

研究課題名（英文）Research on Reflection in Early Childhood Care and Education Practices Based Visual Narrative.

研究代表者

横山 草介（Yokoyama, Sosuke）

東京都市大学・人間科学部・准教授

研究者番号：60803484

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は保育実践の省察と改善に関するアプローチに（a）ヴィジュアル・ナラティブの方法論を導入し、（b）言語とは異なる方法によって保育実践の省察を行う手法を開発し、（c）その有効性を保育所への試験的導入とフィールド調査によって検証することにあつた。本研究を通して視覚的なイメージを媒体としたリフレクションにおいては、（1）同僚間の保育実践についての信念や価値観のイメージレベルでの共有の円滑化がなされ、加えて（2）対象と言葉との一義的な結びつきを旨とする言語とは異なり、視覚的なイメージの内包する多義性、保育者間の保育実践についての多層的な対話を誘発することが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

保育実践の省察に関する従来アプローチは「実践の言語化」という観点において言語の使用に重心を置いて構想されてきた側面がある。しかしながら、実践の言語化を前提とするリフレクション研究においては、言語による意味づけの困難な出来事をどのように掬いあげるかといった課題や、現職の保育者においては実践の言語的な意味づけに負担を感じるケースもきかれてきた。こうした課題に対し本研究は、保育実践のリフレクション過程に視覚的な図像イメージを介した実践の意味づけと省察を行うという方法論（ヴィジュアルナラティブアプローチ）を導入することによって、言語の使用に重心を置いてきたリフレクション研究の動向に新たな視野を拓いた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study were to (a) introduce the methodology of visual narrative into the approach to reflection and improvement of childcare practices, (b) develop a method for reflection on childcare practices by a methodology of visual narrative, and (c) verify its effectiveness through a pilot implementation in a childcare center and a field study. Through this study, it became clear that reflection using visual images, (1) facilitates the sharing of beliefs and values about childcare practices among colleagues at the level of images, and (2) unlike language, which is based on a univocal connection between objects and words, visual images have multiple meanings and induce a multilayered dialogue about childcare practices among childcare professionals.

研究分野：子ども学

キーワード：ヴィジュアル・ナラティブ ナラティブ 質的研究 保育実践 イメージ描画法 省察 保育者 保育の質

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

「子ども・子育て支援新制度」の施行に伴って、多様な子育て支援事業の展開が促される一方で、保育の質保証や質改善の問題については様々な議論が重ねられてきた。これらの議論に関わって、保育実践の評価や省察に関する諸研究は、保育の質に関する客観的なベンチマークや評価スケールの開発、個々の保育現場における園内研修や保育カンファレンスの研究を進めてきた。

だが、これらの諸研究は、保育の質や実践の言語化という意味において言語の使用に重心をおいて展開してきた側面がある。たとえば、保育の質に関わるベンチマークやガイドライン、評価スケールは、保育の環境や内容の言語化に基づいて当の指標を記述するものである。また、特定の保育場面をめぐっての園内研修や保育カンファレンスにおいても、保育実践の言語化が前提とされている場合が多い。しかしながら、保育の実践のなかには、言語による意味づけが困難な事象というもの少なからず存在する。また、現職の保育者においては、言語による実践の意味づけという作業に負担を覚えるケースも聞かれてきた。

2. 研究の目的

こうした現況に対し本研究は、保育実践の省察と改善に関するアプローチに（1）ヴィジュアル・ナラティブの方法論を導入し、（2）言語とは異なる手法によって保育実践の省察を行う手法を開発し、（3）その有効性を保育所への試験的導入とフィールド調査によって検証することを目的として行われた。以上の研究を通して、言語による実践の省察と、図像（ヴィジュアル）による実践の省察との違いは何なのか。言語による実践の省察の利点と限界、また、図像による実践の省察の利点と限界は何なのか、といった問題を明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

本研究は3つの研究段階を辿って遂行されている。以下、各研究段階における研究内容の概要とその手続きについて概略する。

（1）保育実践の省察、およびヴィジュアル・ナラティブに関する先行研究の整理

保育の質保証ならびに質改善を目的とする保育実践の省察に関する研究には、大きく2つの研究動向が認められる。1つ目の動向は、保育の環境や質を客観的に評価するためのベンチマークやガイドライン、評価スケールの開発を目的とした研究である。2つ目の動向は、個々の保育現場に固有の実践の省察と改善を目的とした園内研修や保育カンファレンスの在り方に関する研究である。

また、本研究の問題意識は保育実践の省察に関する従来研究が、実践の言語化という点において言語の使用を前提に敷いてきたという点にあった。この動向に対し、本研究は保育実践の省察にヴィジュアル・ナラティブの方法論を導入することによる実践上の意義を、言語による実践の省察との比較において明らかにすることを目的とした。本研究の第1段階においては、研究の学術的な背景を明らかにすることを目的とし、保育実践の省察に関わる国内外の研究動向を明らかにするとともに、ヴィジュアル・ナラティブについての方法論上の整備を行なった。

（2）ヴィジュアル・ナラティブによる保育実践のリフレクション手法の開発

研究の第2段階では、保育実践の省察にヴィジュアル・ナラティブの方法論を導入することを試みた。ヴィジュアル・ナラティブとは、諸個人が遭遇した出来事や体験、思想、価値観、信念といったものを視覚的な図像イメージによって表現する行為及びその所産を意味する（やまだ, 2018）。従来のリフレクション研究においては言語の使用や数量的な指標にリフレクションの重心が置かれてきたこと

【1 研究目的、研究方法など（つづき）】

は既に述べた。これに対し本研究は、保育実践の省察を言語や数量的な指標のみに基づいて行うのではなく、保育者自身が自らの実践について描き出す図像イメージを用いて行う方法を開発した。

(3) ヴィジュアル・ナラティブの方法論に根差したリフレクションモデルの研究協力園への導入とその効果の質的検討

研究の第 3 段階では、ヴィジュアル・ナラティブの方法論に根差した「イメージ描画法 (Image Drawing Method)」（やまだ, 1988) を用いた保育実践のリフレクションモデルを研究協力園に導入し、その効果について質的な検討を行なった。実際の研究に際しては研究協力園において月に一度実施されている保育カンファレンスに参加し、日々の保育実践の省察に「イメージ描画法」を用いたリフレクション手法を導入するという手続きをとった。研究データについては保育カンファレンスの場において研究協力園の保育者を対象としたグループインタビューを行うとともに、保育カンファレンス全体の記録を行い、それらを研究データとした。得られた研究データは保育者自身によって描かれた自らの実践についてのイメージ画と、描かれたイメージ画についての保育者自身による語りである。これらのデータについては収集後、質的コーディングの手続きを経て分析が行われた。

4. 研究の成果

(1) 保育実践のリフレクションならびにヴィジュアル・ナラティブに関する先行研究の概要

本研究の第 1 段階に据えられた研究課題は、保育実践のリフレクションならびにヴィジュアル・ナラティブに関する国内外の先行研究の整理を行い、本研究の実践上、学問上の位置づけを明らかにすることにあつた。上記の研究計画に照らした研究成果として以下 2 点をあげることができる。

保育実践の省察に関わる諸研究には、(1) 保育の質に関わる客観的なベンチマークやガイドライン、評価スケールを開発し、それらに基づいて保育の環境や内容の評価を行うアプローチと、(2) 個々の保育現場において日常的に為されている保育実践を記録し、園内研修や保育カンファレンスにおいて、当の実践を協同的に省察することを通して保育の省察と質改善を目指すアプローチの 2 つの方向があることが確認された。

前者のアプローチにおいては「数量的」な手法に基づいて保育の環境や内容のアセスメントを進める傾向が認められ、後者においては「質的」な手法に基づいて保育の環境や内容のアセスメントを進める傾向が認められる。両者はいずれも保育実践の省察と改善に有効な指針を提供し得る一方で、いずれのアプローチも実践の数値化や言語化といった側面において数量や言語の使用に基づいた省察やアセスメント手法として構想されている傾向が確認された。

一方、ヴィジュアル・ナラティブの方法論に関する諸研究については、我が国においてはやまだ (1988) による先駆的な取り組みに負うところが多く、隣接するアプローチとの比較など理論上、方法論上の整備を進める必要とともに、実証研究への展開が待たれている状況が明らかとなった。

(2) ヴィジュアル・ナラティブによる保育実践のリフレクション手法の開発

本研究の第 2 段階は、ヴィジュアル・ナラティブの方法論に基づいた保育実践のリフレクション手法を開発することにあつた。ヴィジュアル・ナラティブは、諸個人が遭遇した出来事や、体験、思想、価値観、信念といったものを視覚的な図像イメージによって表現する行為及びその所産を意味する (やまだ, 2018)。従来のリフレクション研究においては言語や数量的な指標の使用が前提に敷かれてきたことはすでに指摘した通りである。これに対し、本研究課題においては、保育実践の省察を言語のみに基づいて行うのではなく、出来事や体験についての図像イメージを介して行う手法を開発することを目指した。

【1 研究目的、研究方法など（つづき）】

研究協力園における実地調査においては「イメージ描画法（Image drawing method）」（やまだ, 1988）と呼ばれる手法を用い、保育者が日々の実践において抱いている実践についての信念をイメージとして描出してもらい、保育者間で共有するという方法を採用した。実際の調査においては研究協力園の保育カンファレンスの時間を用い、上述の手法を試行するとともに、グループインタビューによって研究データの収集を行った。

本研究の結果、保育実践のリフレクションに際してヴィジュアル・ナラティブの方法論に根差した手法を用いることの有効性として以下の4点が確認された（横山・関山, 2020, 2022）。

- ① 実践に関わる体験や価値観、信念の複雑な関連を1つの図像イメージとして全体性をもって表現することができる。
- ② 視覚的な図像イメージとしての表現が他者への高い伝達力を有する。
- ③ 1つの図像イメージから巨視的な省察と、微視的な省察の両方が可能となる。
- ④ 1つの図像イメージに対し、多様な解釈や意味づけを行うことが可能であり、リフレクションをめぐる対話が多義的、創発的なものとなる。

以上に加え、保育者が日々の実践の中で抱いている実践についての信念を視覚的な図像イメージによって共有する方法は、実践の言語化や数量化を試みるよりも認知的な負荷が軽く、実践についての考え方の共有や対話がしやすくなるという効果が明らかになっている（横山・関山, 2020, 2022）。

一方で、実践についての視覚的な図像イメージは、保育者が日々の実践において抱いている実践についての「信念」や「実践観」の共有には適しているものの、日々の保育実践に伴われる個々の具体的な行為や所作と結びついた「実践知」の共有には向かない可能性も明らかになった（横山・関山, 2022）。

(3) ヴィジュアル・ナラティブに基づいた保育実践のリフレクション手法の有効性と課題

ここまでの研究成果に基づくならば、ヴィジュアル・ナラティブの方法論に根差した「イメージ描画法（Image drawing method）」を用いた実践のリフレクションは、同僚間の保育実践に対する信念や価値観の共有を円滑化し、加えて、視覚的なイメージを触媒とすることによって保育実践についての多義的で創発的な対話が促進される可能性が示された（横山・関山, 2020, 2022）。一方で、実践についての視覚的な図像イメージは、個々の保育者が日々の実践において抱いている実践についての「信念」や「実践観」の共有には適しているものの、日々の保育実践に伴われる個別具体的な行為や所作と結びついた「実践知」の共有やリフレクションには向かない可能性が明らかになっている（横山・関山, 2022）。

本研究を通して、保育実践のリフレクション過程に視覚的な図像イメージを導入することによって、言語や数量的な指標に基づいた実践のリフレクションとは異なるリフレクション実践が可能になることが明らかとなった。とくに、言語や数量的な指標に基づいた実践のリフレクションにおいては、特定の実践とその意味づけのあり方において「一義性」が旨とされ、そのことが保育者のリフレクションに対する負担感と結びついている側面があった。これに対し、視覚的な図像イメージを用いた実践のリフレクションにおいては、特定の実践とその意味づけのあり方において「多義性」が旨とされ、そのことが保育者のリフレクションの視野を拡張するとともに、同僚との実践の方向性の共有や実践についての創発的な対話という点においても効果を発揮することが明らかになった（横山・関山, 2020, 2022）。

他方、保育者自身が描出する視覚的な図像イメージを用いた実践のリフレクションは、個々の保育者が日々の実践において抱いている実践についての「信念」や「実践観」の共有には適しているものの、日々の保育実践に伴われる個別具体的な行為や所作と結びついた「実践知」の共有やリフ

【1 研究目的、研究方法など（つづき）】

レクシオンには向かない可能性が明らかとなった（横山・関山, 2022）。

文献

やまだようこ（1988）私をつつむ母なるもの：イメージ画にみる日本文化の心理. 有斐閣.

やまだようこ（2018）ビジュアル・ナラティブとは何か. N：ナラティブとケア, 9, 2-10.

横山草介・関山隆一（2022）ヴィジュアル・ナラティブによる保育者の実践観の研究. 保育学研究, 60(1), 21-32.

横山草介・関山隆一（2020）保育者の実践観の変容に関するヴィジュアル・ナラティブアプローチ. 保育学研究, 58(2-3), 155-166.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 横山 草介、関山 隆一	4. 巻 60
2. 論文標題 ヴィジュアル・ナラティブによる保育者の実践観の研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 21～32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20617/reccej.60.1_21	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 横山草介	4. 巻 14
2. 論文標題 質的研究におけるデータの代表性と解釈の妥当性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京都市大学 人間科学部紀要	6. 最初と最後の頁 59-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 横山草介	4. 巻 13
2. 論文標題 「二つの思考様式」の射程	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京都市大学人間科学部紀要	6. 最初と最後の頁 69-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 横山草介・関山隆一	4. 巻 58
2. 論文標題 保育者の実践観の変容に関するヴィジュアル・ナラティブアプローチ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 155-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20617/reccej.58.2-3_155	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 横山草介	4. 巻 12
2. 論文標題 フォークベダゴジーの対話的展開	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京都市大学 人間科学部紀要	6. 最初と最後の頁 43-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 横山草介	4. 巻 11
2. 論文標題 フォークベダゴジーの理論的射程	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京都市大学 人間科学部紀要	6. 最初と最後の頁 53-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 上田洋平・やまだようこ・横山草介・土元哲平・家島明彦・保坂裕子
2. 発表標題 ビジュアル・ナラティブとしての「ふるさと絵屏風」
3. 学会等名 日本発達心理学会 第34回大会 立命館大学 (対面開催)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 横山草介・庄井良信・嶋口裕基
2. 発表標題 ナラティブラーニングの射程とその展開可能性
3. 学会等名 日本発達心理学会 第34回大会 立命館大学 (対面開催)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 家島明彦・やまだようこ・細馬宏通・横山草介
2. 発表標題 映画とビジュアル・ナラティブ：「ドライブ・マイ・カー」の映像、身体、ことば
3. 学会等名 日本質的心理学会 第19回大会 愛知大学（対面開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山草介・水津幸恵・永倉みゆき・浅見佳子・やまだようこ
2. 発表標題 ナラティブプラクティスとしての保育研究
3. 学会等名 日本保育学会 第75回大会 聖徳大学（オンライン開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山草介
2. 発表標題 「意味の行為」の視座から「ラーニングストーリー」を再考する
3. 学会等名 日本保育学会 第75回大会 聖徳大学（オンライン開催）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山草介・関山隆一
2. 発表標題 ヴィジュアル・ナラティブを用いた保育者の実践観の研究
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akihiko Ieshima, Sosuke Yokoyama, Yoko Yamada, Xiaohong Zhang, Sunah Oh, Younglim Noh
2. 発表標題 Visual Narrative: Diversity, Imagination and Possibilities
3. 学会等名 The First Trans-Asian Meeting on Psychological Methods (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横山草介
2. 発表標題 ヴィジュアルナラティブの探求における「視覚的な描写」と「言語による記述」との差異の検討
3. 学会等名 日本質的心理学会第18回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 家島明彦・横山草介・やまだようこ・中澤潤・木下寛子
2. 発表標題 ビジュアル・ナラティブの理論：イメージ、記号、ビジュアル言語
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡辺涼子・宮崎清孝・野口紗生・庄井良信・横山草介
2. 発表標題 想像遊びの協働的構築におけるナラティブの意味：Brunerのナラティブ論を手がかりに
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 横山草介・関山隆一・児玉七恵・近岡彩・やまだようこ
2. 発表標題 保育実践へのヴィジュアル・ナラティブ・アプローチ
3. 学会等名 日本保育学会 第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山草介
2. 発表標題 ヴィジュアル・ナラティブを用いたフォークペダゴジーの探究
3. 学会等名 日本質的心理学会 第17回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 家島明彦・やまだようこ・浦田悠・神崎真実・土元哲平・木戸彩恵・横山草介・滑田明暢
2. 発表標題 ビジュアル・ナラティブのデータ分析法
3. 学会等名 日本発達心理学会 第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横山草介・関山隆一
2. 発表標題 ヴィジュアル・ナラティブによる保育実践の省察に関する研究(1)
3. 学会等名 日本保育学会 第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 関山隆一・横山草介
2. 発表標題 ヴィジュアル・ナラティブによる保育実践の省察に関する研究(2)
3. 学会等名 日本保育学会 第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yokoyama Sosuke, Sekiyama Ryuichi
2. 発表標題 How Child Carers are Changing Beliefs on Their Own Practices: A study on Visual Narrative.
3. 学会等名 OMEP Asia Pacific Regional Conference 2019 in KYOTO (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 やまだようこ・家島明彦・瀧田裕子・横山草介・後藤一樹
2. 発表標題 ビジュアル・ナラティブの実践性と多様性：ビジュアル・ナラティブによるフォークペダゴジーの解明
3. 学会等名 日本質的心理学会 第16回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 横山草介
2. 発表標題 フォークペダゴジーへのヴィジュアル・ナラティブアプローチ
3. 学会等名 日本発達心理学会 第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 横山草介・嶋口裕基・阿部廣二・松熊亮
2. 発表標題 ブルーナー派 Narrative Cultural Psychology の方法論
3. 学会等名 日本発達心理学会 第31回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関